

東京湾岸の変遷

東京湾の現況

東京湾は水面面積が約1200km²と、長野県や秋田県に匹敵する広さの閉鎖性水域です。しかし、面積は広いものの、湾中央部での水深は20m程度であり、右図の縮尺でいえば、その深さは0.03mmに相当するにすぎません。

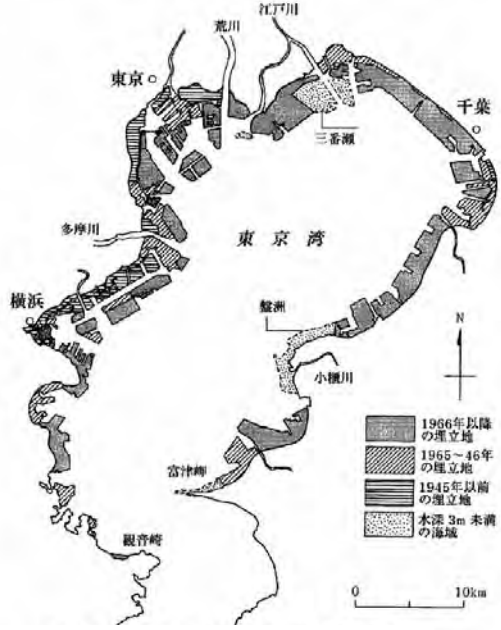
このような薄い容れものの中に、多摩川・江戸川・荒川を始めとする河川が、都市排水や工場排水などとともに流入し、古くから水質問題を惹起してきました。

首都圏の経済・産業基盤のかなりは東京湾岸に依存し、工場などの事業所も湾岸に多く立地しています。また、近年の臨海部での再開発のほか、東京ディズニーランドや臨海公園など、その利用は多岐にわたっています。

東京湾では、周縁のかなりにわたって埋立てが進められて、海岸線は垂直の護岸と化し、干潟などの自然の景観が見られる場所はあまりありません。ここでは、このような湾岸の変遷を地図の上で見ていただきます。

地図に見る埋め立ての進展と湾岸の変貌

江戸初期には、新橋・浜松町あたりから大手町あたりに、日比谷入江と呼ばれる水域が入り込んでいました。江戸開府にあたっては、諸大名は、入江や低湿地を埋立てて藩屋敷を作らねばなりません。しかし、江戸時代をとおして見れば、市街地に近い沿岸は塵芥や大火時の廃材捨場として埋立てられていったものの、全体としては豊かな自然と共生した、江戸前の豊富な魚介類や海苔などに恵まれた美しい海辺でした。



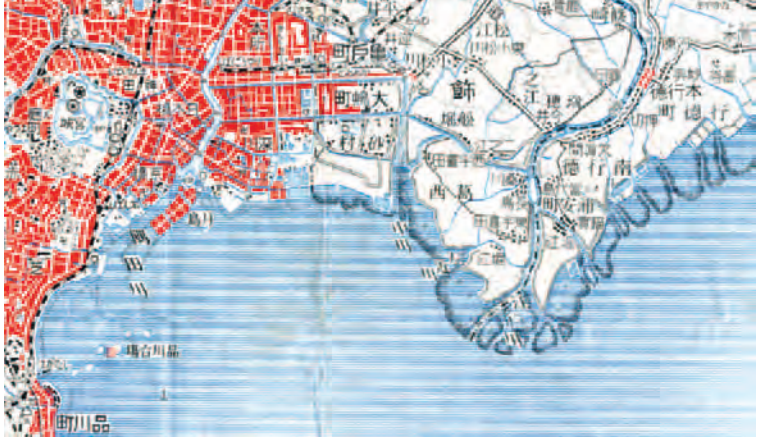
東京湾岸での埋立て地の拡大状況と現在の干潟 (小池, 2000: 東大出版会「日本の地形, 第4巻」を簡略化)

東京湾岸が本格的に変貌し始めるのは、明治中期以降となります。下に示す一連の地図は、この間の変遷(地図の説明中に記述。)を如実に物語っています。

現在の東京湾岸に残る規模の大きな自然の干潟は、江戸川地先の三番瀬と、千葉県小櫃川下流の盤洲干潟くらいです。かつては、全域にわたって遠浅の干潟が連なり、そこに棲息するさまざまな生物が海域における天然の浄化機能を担っていました。また、潮干狩りや海水浴などの楽しい場を提供してきました。

一方で開発側から見れば、このような遠浅の海岸は埋立てが容易であって、東京大都市圏の拡張には格好の場で

20万分1地図に見る東京湾奥の変遷(同一場所の比較; 地図は原寸)



20万分1 帝国図「東京」(1921年修正, 陸地測量部), 原寸。明治20年代以来の月島埋立地が見える程度。荒川は隅田川として東京湾に注ぎ、江戸川末端の三角洲地形が見事。幕末に築造されたお台場は、まだ遙か海上に。



20万分1 地勢図「東京」(1957年編集, 地理調査所) お台場の線の外側に夢ノ島・東雲・有明の埋立地が造成中。荒川は市街密集地の外側に新放水路が設けられ、江戸川にも洪水疎通のための放水路が開さく済み。

あったことから、人口増加・産業活動の活発化とともに、たちまちに埋立てが進んでしまいました。

明治5(1872)年に、新橋・横浜間に最初の鉄道が敷かれた頃には、線路の一部は遙か彼方に品川のお台場を望む海上に盛土されて開通しました。それが今では、お台場そのものが湾岸道路のかなり陸側に取り込まれた形で、埋立地と一体化しています。埋立地の総面積は、かつての湾内海面の20%近くになりました。

環境改善・東京湾再生への期待

高度経済成長期を通して、昭和40年代を中心に東京湾の水質汚濁には著しいものがありました。その後は諸規制と下水道の普及など、各方面における努力によって水質はかなり改善されてきています。昨夏以来あちこちを転々とする「タマちゃん」のほほえましい姿には、水質についての好印象を持つかも知れません。しかし、富栄養化による赤潮の発生なども時折報じられています。

東京湾については、関係省や関係の都県によって、自然と共生する豊かな空間の形成や活力ある臨海部空間の形成など、湾の再生を目指しての施策が進められつつあり、開発・利用と環境との調和が期待されています。

当社では、1970年頃の深刻な富栄養化問題に対して、水質シミュレーションや富栄養化モデルの調査を行い、これらへの評価が、当時から本格化した東京湾横断道路関連などの大規模調査受注につながりました。それ以降も引き続いて、海域にかかる環境の現況把握・保全・再生に関する各種の調査を受注・実施しています。



上は5万分1地形図「東京南東部」(1916年修正,陸地測量部)。下は、同(2002年修正,国土地理院)での同一場所の比較。ともに、×0.8に縮小。

上図では、典型的な三角洲に立地した農村風景で、海岸線の前面1.5kmまでは広大な隠頭砂洲が広がる。下図を慎重に読めば、以前の道や河川をたどることが出来る。しかし、図に見るとおり景観は一変して、かつての景観をしのぶものはない。



同(1970年修正,国土地理院)

高度経済成長ただ中の状況。大規模な埋立て事業が相次いで実施され、東京港の埠頭施設は外側に展開中。旧江戸川下流の一部には、まだ自然が残っている。



同(1997年修正,国土地理院)

東京湾岸道路などの幹線交通路が完成し、東京ディズニーランドも見える。その外側でも都市化進行中で、図の範囲では自然海浜といえる場所はもうない。